聖女が世界を救う話

麻婆炒飯

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２話完結の短編です。

目次

前編 1
中編 16

前編

「お前との婚約、今日この場でもって破棄させて貰う！愚かにも聖女の名を騙る偽聖女リティッ!!」

その日、私の希望は崩れ去った。

私が信じてきた全てが、嘘のように壊れて消えた。

時は聖暦１５９４年、世界最大の国土を誇る大国、神聖国シディアの中心に位置する聖都ラスラ。

私、リティ・リーフィスは聖都の郊外に並ぶ平民街のごくありふれた家庭の次女として産まれた。

厳しくも優しい両親と、大好きな姉サクリと私の四人家族が暮らす家は、これと言って貧し過ぎる訳でも、豊か過ぎる訳でも無い、ごく普通の家庭であった。

平凡でありながら穏やかで掛け替えの無い、楽しい毎日を３人の家族と生きていた。

そんな日常が塗り変わったのは突然だった。
姉サクリが１２歳の誕生日を迎えたその日、姉の左手の甲に聖なる紋様が浮かび上がったのだ。
それは、世界を救う役割を担うとされる『聖女』が宿すという『聖紋』に間違い無かった。

この広い世界に住む人々は、創造神の加護で護られた『聖域』の外側では常に命の危機に晒されている。
外には人類に対して強烈な敵意を持ち、人に仇なす獣達『魔物』が溢れているのだ。
だが、だからと言って全ての人類が聖域の中で暮らせる程、聖域は広くはない。聖域の範囲は王都とその近辺に限られていて、その外側に住まう人々も確かに存在する。そんな人達は村の周りに防壁を築いたり、近付く魔物を討伐したりして命を繋いでいる。
しかしそれにも限界がある。
だからこそ世に現れた『聖女』が外界を渡り歩き、魔物達を『聖女』の力で浄化してその数を減らす事で聖域の外側で生きる人々の平和と安寧を護るのだ。
そしてその力は行使すると同時に、王都周辺の『聖域』をより神聖なモノへと強化していく事も出来るのだという。だからこそ世に生まれた聖女は覚醒と共に親元から離

れて国に手厚く保護され、いずれは「世界を救済する」という尊い道へと旅立っていく。
それは神聖国に住まう人々にとってとても羨ましい事であったし、当時の私も喜んで姉を見送った。
だが……今思えば、姉はあの頃から既に、己に待ち受ける運命を知ってしまっていたのかも知れない。
そうでもなければ――――、

「……リティ？」
「なぁに？お姉ちゃん。」
「一緒に、家出しちゃおうよ。お父さんも、お母さんも連れて４人で、何処か遠くに――――。」
「ダメだよお姉ちゃん。寂しいのは解るけど、これでも神様が授けてくれたお役目なんだもん。」
「っ……うん、ごめん。」
「大丈夫だよ。一生会えなくなる訳じゃ無いんだから。節目の日には会いにだって行けるんだし。」

「リティは……強いね。…おやすみ。」
「うん。頑張れお姉ちゃん。おやすみなさい。」

――あんなにも気丈で大人ぶっていたお姉ちゃんが、最後の夜に妹と一緒のベッドで寝ようだなんて言い出すはずも無いし、別れの時に向けた顔が、今にも泣きだしそうな笑顔であったはずが無いのだから。
そうして姉サクリは聖女として旅に出て……

そのまま、二度と帰って来る事は無かった。
旅に出てから1年半が経った頃、神聖国の長い歴史においても類を見ない「魔物を統べる魔物」…『魔王』の攻撃を受けて瀕死の重傷を負い、護衛の騎士達の奮戦も虚しく伝達役を残し全滅してしまったのだという。
その訃報を聞いたその日、父も母も、無論私自身も、丸一日泣いて過した事を今でも覚えている。
そしてその2ヶ月後…私の左手に「聖紋」が顕れた。
まだ家族を喪った心の傷が癒えていない両親はどうにか私を隠そうとしたようだが、

そんな足掻きが通じるはずもなく、聖教会によって私は聖女としての教育を受けるべく家族の元を離れ、王都中央の聖教会本部で「聖女見習い」として生活する事になった。

私が己の中で掲げた目標は、世界の救済。聖女の役目を果たす事。そして…お姉ちゃんの仇を討つ事。

その為に辛い訓練も、難しい勉強も乗り越えて、他にも幾人かいる見習い達の中でもトップを維持したまま1年…ついに、正式に聖女として認められた。

私の聖女としての最初の仕事は、教会の地下に捕らえられ弱った魔物を浄化する事だった。

何でも教会によって認められた聖女が正しく力を行使できるように、最初は必ずこうして教会の側で予め捕らえた魔物を浄化させるのだという。

私に用意されたのは、全身が黄金色の毛で覆われ、左腕の無い、人と犬の中間のような怪物だった。

どうにも私の姿を見てから急に酷く暴れだしたようだけれど、神聖力を纏った十字架に磔にされた状態であった為に意味は無かったし、かなり弱っていたから、まだ拙い私の浄化でも数分程で塵になって消滅した。

それ以降何度も魔物を浄化したけれど…あの日の……「お姉ちゃんと同じ色の体毛を

纏った女性型の獣人」の魔物だけは、忘れられそうになかった。
それから数日後、私はかつてのお姉ちゃんと同じように七人の優秀な護衛騎士を連れて、世界各地の魔物を浄化して回る旅へと出る事になる。
最終的な目的地は世界の東の果てにあるという、「魔王」が本拠として住まう禍々しい古城。
そこで魔王を浄化する（お姉ちゃんの仇を討つ）為に、私の持ち得る全てを賭けて戦い、戦い、戦い続けて――――、

「成程…確かに君は、「最高の聖女」だ。」
「勝敗は決しました…貴女を浄化します、魔王。」
「くふ…そうだね。今は敗けを認めよう。」
「……その潔さにだけは、敬意を評します。」
「有難う…君はこの先の要だ、決してこの世に在る最大の悪意が何者なのか…見誤ってはいけないよ?」
「聖なる神の御名のもとに、悪しき魂の浄化を…!」
「うん、良い腕だ。また逢おう、リティ――――。」

――――長い戦いの果てに、魔王の浄化は成功した。
当初7人いた護衛の騎士はおよそ2年間の戦いの中で2人にまでその数を減らし、私自身も身体のあちこちそれなりの生傷を負っての辛勝だった。
浄化の間際に魔王が呟いた最後の言葉はささくれのように胸に引っ掛かったままだったけれど、それでも私は世界を救う（家族の仇を討つ）事が出来たのだ。
そうして私はどうにか近場に設営した拠点に戻り、事の顛末を伝えて世界に魔王の討伐を発信した。

――――戦いは、終わった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

戦いを終えた私を待っていたのは家族との平穏ではなく、世界を救った英雄として、救国の聖女として神聖国の政治的な神輿にされるという嫌な運命だった。
聖王陛下から問答無用で爵位を与えられて貴族教育を受け、神聖国の臣下序列第一位

にあたる公爵家、ノイデア家の後継となる長男ソフル・ノイデア様との婚約を私の意志とは関係なく強制的に決定付けられた。

それでも、私が神聖国の道具として生涯を過ごさなければならないとしても、それで大好きな家族が何一つ不自由なく生きて行けるのだと思えば、こんな運命でもどうにか受け入れる事が出来た。

幸いにも婚約者になった彼は貴族社会の中でも有数の「優しい人」で、顔立ちも良く、私の意志を国の決定に背かない程度には、尊重してくれていた。

そうして抱いた感情は決して愛では無かったと思うけれど…彼と一生を添い遂げる自己犠牲の覚悟は、思いの外すんなりと決める事が出来ていた。

なのに――――――、

「よくも今まで僕を、僕達を騙してくれたなッ！この醜く穢らわしい魔女めッ！」

「な、何を言って…ソフル様…？」

「穢れた魔女が、気安く僕の名を口にするな！」

「そんな…どうして…！」

「言わねば解らないか。貴様は魔物の分際で、”リティを殺害し、彼女に化けている”だろうがッ！」

「……は…？」

意味が分からなかった。

私は私だ、聖都郊外の街で生まれ育ち、たった1人の姉を喪い、その仇である魔王を聖女として討ち果たした、正真正銘”人間”の”リティ・リーフィス”だ。

それがどうして、そんな話になっているのか？

全く以て、理解する事が出来なかった。

あぁ、周囲の貴族達の視線が刺さる。

ここに来てすぐの頃、何度も感じた嫌悪感だ。

ただの平民でありながら爵位を授けられ、序列一位の公爵家に名を連ねる婚約者となる事が確約された私を妬み、嫉み、煩わしく思っていた悪意の視線。

今は私の状態をほくそ笑み、「ざまぁみろ」「たかが平民の分際で」と、私の没落を望む悪意の視線。

それはとても気持ちが悪く、五臓六腑がズタズタに切り裂かれるような虚像の痛みが全身を苛んで…

「ちが…私、は……うっ…ゲホッ、ゴホッ…ゥェ…」

「ッ！やはり…正体を見せたな化物ッ！」
「っ…!?だから、ちが……！」
「黙れ醜い魔物風情がッ！尊き聖女が…人間が、そんな”黒く悍ましい血”を吐き出すモノかッ!!」
「あ……え…？」

何を言っているのか解らない、私は……私は？
私は……どうなってしまったのだろう。
私は、本当に…”黒くドロドロの血”を吐き出していた。とても人間が吐き出すモノとは思えない血は…私自身、己が人でない事を疑わせるに足るモノだった。
「ようやく理解したか……最高司祭！」
「うむ……リティ…否、聖女に扮した魔物よ。大人しく我等の浄化を受け入れよ。騎士達よ、聖句をッ！」

あぁ…歌が聞こえてくる。
聖女見習いであった頃、何度も何度も練習をしてやっと覚えた、魔物の自由を縛る聖なる歌…聖句。

強力な神聖力を纏った歌が拘束具となって私の身体を絡め取り、その意識を混濁させていく。

否…たとえそんなモノが無かったとしても、私は…私には、拘束に抗う精神力は遺されていなかった。

この日、私は…”聖女殺しの魔物”として、聖教会の主導のもと捕縛、地下牢へ収監された。

「……まったく、だから言ったじゃないか…真の悪意を見誤るな、って。…まぁ、こうなる事は目に見えていたし、その為にこうしているんだけど…」

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

「ぁ……う…」

「随分と強情ですな…いい加減、その皮を脱ぎ捨てたら如何です？聖女様の御姿を穢すなどと…」

「そんな、事…言われても……」

私は地下に囚われてからというもの、神聖力を纏った十字架に磔にされ尋問を受けていた。

とはいえ、私には自分自身が魔物であるという自覚が無い。血がヒトのソレでは無かったからそうなのだろうとは思うが、自分がどうやって擬態しているのか、どうやって聖女を殺したのか、いったい何時から魔物と入れ替わっていたのかさえも解らなかった。

けど、教会がソレを聞き入れてくれるはずも無い。

私は磔にされてあらゆる力を封じられたまま、似た質問に同じ返事をする度に拷問を受けている。

爪は両手両足併せて２０枚全て剥がされ、全身は打鞭の痕と切り傷に刺し傷で、ボロボロになっていた。

精神力はとっくに限界を迎えて、助かる糸口を見つける気すらも起きなくなっていた。

もう、このまま息絶えてしまった方が楽なのではないだろうか。そう考える時は日に日に増えて、もはやあれから何日経ったのか解らないし、そんなネガティブな考えが浮かぶ時の方が多くなってしまった。

そんな時――――、

「君はここで死ぬべきじゃない。」

声が、聞こえた。

それは何処かで聞いたような声。けれど今は、そんな事を考えている余裕なんか残っていなかった。

「君には役目がある。」

「ぁ……う…」

私には役目がある…

役目ってなに？これ以上私に何をしろって…

「リティ、君は本物の聖女だ。」

「わたし、は……」

「…む？懺悔をする気にでもなりましたか？」

私は、聖女。

……そうだ。私は、役目を果たせずに殺されたお姉ちゃんの代わりに、この世界を救うんだ。

世界から、悪意を取り除く事…それが……

「せ……よ…わ、り……」

「……何です？もう少し声を大きく。」
「わたしは、世界を救う為に生まれた聖女。その役目を果たすまで、死ぬ訳にはいかない…ッ!!」
「なッ……この期に及んでまだ…！」
『よく言った、満点だよリティ。』
今度は、ハッキリと聞こえた。
そして同時に、磔にされた私の身体から大量の黒い靄が溢れ出て、1つの人型を形作っていく。
けれど、私に認識出来たのはそこまでだった。
元々かなり身体に負荷が掛かっていたのだ。急にあんな気勢を張って、疲れきった身体が少しでもその身を癒そうと、意識を遮断しようとしていたのだ。
一気に重たくなった瞼に閉ざされようとしている瞳が最後に捉えた光景は……紅い髪、濃褐色の肌をした女性…黒い軽鎧を身に纏った、忌々しくもよく見知った、因縁深いその姿は――――、
『よく頑張ったねリティ、今は私に任せてゆっくりお眠り。…役目を果たす刻限まで、君を護ろう。』

その日、救国の聖女リティ――――、
否、聖女に扮した悍ましき魔物は、突如として現れた人型の魔物…第二の『魔王』によって強襲、奪還され、聖都からその姿を消したのだった。

――――To Be Continued.

中編

「――――ん……う…？」

眠りという深い暗闇に沈んだままでいた意識が少しずつ目覚め、現実へと浮上していく。

未だに重たい瞼を何とか開き、目を軽く擦ってまだ少しぼやけている視界を確保するとそこは…豪奢な天蓋付きの紅い寝具が揃えられたベッドの上だった。

「ここ、は……？わたし、は……」

まだ寝惚けているのか、記憶がハッキリしない。

それでも周囲を見渡し、自身が置かれた状況を少しでも把握しようと努めて意識を働かせる。

そうしているうち、この脳みそもようやく目を覚ましたのか、ぼやけていた記憶もハッキリしてきた。

そうだ、私は魔女として全てを失い、教会に捕縛されたのだ。それからどれくらい続いたのかなんて知りたくないくらい長い間、拷問に晒されていた。

「この場所……もしかして…」

ハッキリと目覚めた頭で再度周囲を見渡し、そうして気付く。部屋全体の「薄紫色の壁紙」。それに何処か禍々しさを感じさせる、濃紫色の支柱。

私はこの場所を知っている。

たった一度訪れただけだが、それでもこの目に悪い配色は一度見ればそう忘れられないだろう。

「魔王…城…？」

魔王城、それは人型で活動する魔物の最強種である魔王が当時、己の領地として棲み付いていた古城。

この場所もかつて…まだ今ほど魔物が跋扈していなかった大昔には人間が領地としていたらしいのだが、それも今や千年近くも過去の昔話なのだという。

そこまで考えたところで、視界に入っていなかった場所から不意に、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「無事に目が覚めたようだね、リティ。」

「ッ!!まお…ぅ…っ！」

鮮血のように紅い髪と黄金の瞳、浅黒い肌、そして普段は魔道士がローブの下につけ

るビキニアーマーのように、露出が多く刺々しい鎧を裸の上から身に纏っている、豊かな胸を蓄えた長身の女性。

それは紛う事無き、魔王。

かつて私がお姉ちゃんの仇としてこの手で討ち果たし、首を獲ったはずの、魔王だった。

その姿を認識するとほぼ同時、反射的に身体が動く。自身が身を預けていた紅いベッドから飛び起き離れようとして…その反射に上手く身体がついて来られず、ベッドの上でボスンとカッコ悪く転倒してしまった。

それもそのはず、どれ程眠っていたかは解らないが、私はついこの前まで過酷な拷問に曝されていたのだから。例え傷が癒える程に長く眠っていたのだとしても、そうなればむしろ筋肉が衰えてマトモに動けなかっただろうし、この場がベッドの上で無ければ、怪我をして余計な傷を増やしてしまっていただろう。

だがこの場は何故か生きていた仇敵の本拠地。

私はきっと、ここで嬲り殺しにされる。そう思って若干の諦めと、僅かながらでも未だに残されていた死への恐怖心から瞳を硬く閉じる。

……しかし、いつまで経ってもその時が訪れる事は無い、不思議に思って恐る恐る瞼を開くと……

「まったく…私が憎いのは以前の闘いで知っていたけど、そんな身体で動くのは良くない。君の器は傷付いてボロボロなんだから、今は休まないとね。」

魔王はそう言うとベッドに腰掛けて、上手く動けないでいる私の頭を徐ろに抱き寄せ、抱擁を始めた。

とても苦しい。

怪我が、では無い。抱きしめられた頭が魔王の胸に埋まって、呼吸が阻害されているのだ。私のソレよりもずっと大きく柔らかな胸が口と鼻を塞ぎ、空気を取り込む効率が著しく低下している。酸素を求めて手脚を暴れさせるが、次第にそれも叶わなくなってきた。

「ふぅ……やっと暴れるのを止めてくれた。今はこのまま、少しでも休んで身体を癒すんだよ。」

「む、ぐ……ゥ…」

違うんですそうじゃないんですもう暴れないので離してくださいこのままでは死んでしまいます。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

「さて、それじゃあ説明をはじめようか。」

危うく窒息死しかけた私に大慌てで治癒の術式を施した魔王が1つ咳払いを済ませると、大人しくベッドに身を預け座っている私の横で椅子に座って気を取り直し、何処から取り出したのか空のように真っ青な林檎をナイフを剥きながら、穏やかな声色で語り始めた。

しかし、そうして語られる魔王の話は語調の穏やかさとは裏腹に、俄には信じ難い残酷なモノだった。

それでも、私にはそれを信じないという選択肢は残されていなかった。何故なら彼女は、説明の前に「魂の誓約」という術式を用いて、私との会話で一切の虚言を言えないように自らを縛ったからだ。

まず第一に、魔王は私に討たれた時、その場で魂を分割し、私の中に潜んでその時を待っていたという事。拷問を受けていた時に聞いた声は、どうやら彼女が私を奮い立たせる為に囁いた言葉だったらしい。

第二に、魔王が生まれてから城外へと出たのは後にも先にもその時の1回限りだった、という事。

ならば他に魔王が存在して、ソレがお姉ちゃんを殺したのか、という問いに返ってきたのは否だった。

ならばどうしてお姉ちゃんは死んだのか。

何故あのような報告が届いたのか。

魔王はソレを語ってはくれなかったが、

私にはその理由は既に見当がついていた。

考えたくない最悪の理由ではあったが、それでも、これしか考えられないという程に明確な事実を敢えて語らないのは、彼女なりの優しさだったのだろう。

「心を強く持つんだよ、リティ。」
「ッ…ぅ…はい。続けて下さい、魔王。」
「……リティ。その呼び方でも問題は無いけど、出来れば今後私の事は『エクサ』と呼んで欲しいな。」
「名前、あったんですか……」
「そりゃあねぇ。真名は『エクサージ』だけど、それだと少し長いから『エクサ』が良い。」
「解りました、善処します、魔王。」
「駄目かぁ…まぁいい、続けようか。」

そうして少し空気を入れ替えた後、何処か気の抜けた魔王……エクサは、事の説明を再開する。
エクサが言うには、そもそも聖女と魔王は神が世界を創るにあたって発生した不具合(バグ)……悪意を世界から取り除く為に造られた存在であり、魔王が不具合(バグ)に侵食された動植物…魔物を1箇所に集め、聖女がそれ等を一挙に浄化する、といったものだったそうだ。
しかし千年前に敢行された当初の計画は、予期せぬ妨害によって失敗に終わり、「魔王」は千年間に渡って封印されてしまったのだという。そしてそれを行った裏切り者…当時最も理性に長け、不具合に侵食される可能性が低かった人類でありながら、いとも

容易く侵食され悪意に染まった存在。それが現在の神聖国、その建国王にして神の代行者であったと伝わる初代国王だった。

「神は現世に直接干渉出来ない。これを利用した小僧…初代神聖国王は神の名を騙り、私を封じたんだ。」

「そんな…それじゃあこの永い闘いは…!」

「そう、全部アイツの思惑通り」

人と魔物の戦いは多大な犠牲を払うが、それに伴い兵器製造が発展し、経済が潤うのも事実ではある。

だがソレは一時的なモノであり、平和になれば他の産業が潤うし、余計な犠牲を払わずに済むのだ。

何も知らずにこんな話をすれば、何を夢物語を、と笑われる事だろう。だがそれは「魔物との闘いが終わらない」という大前提ありきで成立する話だ。

元より初代国王が余計な事をしなければ。

歴代王家が、教会が悪意に手を染めなければ。

こんな悲劇はとっくの昔に終わっていたのだろう。

それが、私にはとても辛かった。

「これが、世界の真実だよ」

「ッ…ぐ……うぅ…」
「……リティ、これは気休め程度にしかならないだろうけど。この世の全ての魂は流転している。」
「流転…？」
　「そう。魔物の魂も、人の魂も。魂は死と同時に神に回収され、不具合を浄化して再び生命として宿らせるんだ。」
「それじゃあ…お姉ちゃんも…？」
「彼女が死した時期を鑑みるにまだ浄化の最中だとは思うけれど、間違いなく次の命に流れていくよ。」
「じゃあ…！」
「そうだね。けど今のこんな腐った世界じゃ、生まれ変わったところで幸せにはなれないだろう。」
「ッ…でも、相手が国じゃ勝ち目は……」
「ふッ…その為の君さ、『最高の聖女』リティ」
　最高の聖女。
　以前エクサを討ち取った時、彼女が私の中に潜む直前に語った言葉だ。それから色々あり過ぎてすっかり忘れていたけど、今になってみれば、この言葉…どうやら私が『最

高の聖女』である事が、エクサが千年の封印を解き動きだした理由になっているらしい。
『最高の聖女』は、神々が幾度も試行錯誤を重ねた結果に完成した、『魔王』と『聖女』両方の力を宿した究極存在だ。君は私が保持していた処置を受ける事で、本当の意味での世界救済が可能になる。」
「ならすぐにでも！」
「こら、落ち着くんだリティ。まだこの話は終わってないよ。それに消耗しきった今の君じゃ、私の処置に耐えられず死んでしまう。」
「っ……ごめんなさい。続けて」
「うん、良い子だ。……この処置を受ける事で、君は『この世の存在』では無くなってしまう。」
「ッ!?……それ、って…」
「その通り。世界を救っても、君は救われない。この世の弾かれ者として永遠に彷徨う羽目になるか、良くて神々の御座に永久幽閉、悪ければそのまま存在解体、処分されてしまう可能性だってある。」
「っ……」
「それでも、やれるのかい？」
「わた、わたし……は…」

決められない。
この世界を救うには、それしか方法は無い。でもこれをやれば、私はもう家族に逢う事は出来なくなる。
永久に、私はひとりぼっちになってしまう。
そんな終わりは、受け入れたくない。
でも……
「何も今、答えを出せと言ってるんじゃない。……どうあれ君の身体が耐えられるようになるまで1ヶ月は必要なんだ。それまでゆっくり考えると良いよ。」
「……魔王…」
「大切な家族に二度と会えない苦しみは、私もよく解っているつもりだよ。…千年前の事だけどね。」
そうだ。
エクサも、1つの生命である以上、彼女を生んだ親がいて、彼女が愛したかも知れない家族がいたんだ。
魔王エクサは、たった1人の少女エクサだった頃から、ずっとひとりぼっちで闘い続けてきたんだ。
それなら、私は――――――、

「……ありがとうございます、魔王。」
「礼には及ばないさ。一応何体か使い魔も用意してあるから、城内の案内や身の回りの世話はソイツらに任せてね。私もたまにお喋りしに来るからさ。」
「解りました。それでは今日はこの辺りで…」
「うん、私はそろそろ行くよ。」
「はい。…必ず、期日までに答えを出します。」
事務的なやり取りを終えて、エクサは部屋を出ていった。…正直なところ、もう覚悟は決まっている。あとはほんの少しの心残りと、寂しさを振り切るだけだ。
そうして半月後、私は――――――、
聖女リティは、『最高の聖女』に至る事を決めた。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．